

## ヨハネによる福音書8章12-59節 「真理と偽り」

### 1A 真実な証し 12-20

1B 世の光イエス 12

2B 父を知らないパリサイ人 13-20

### 2A 父のところに行く方 21-30

1B 罪の中で死ぬ者たち 21-24

2B 「わたしはある」という方 25-30

### 3A 真理のことば 31-47

1B 罪からの自由 31-36

2B イエスのことばを聞き入れない者 37-47

1C イエスへの殺意 37-41

2C 悪魔から生まれた者 42-47

### 4A 御父の独り子 48-59

1B いのちのことば 48-51

2B 初めからおられる方 52-59

## 本文

ヨハネによる福音書 8 章 12 節から見ていきます。ここでは、イエス様のことばと、それを聞き入れないユダヤ人たちのやり取りを見ます。

### 1A 真実な証し 12-20

#### 1B 世の光イエス 12

12 イエスは再び人々に語られた。「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」

イエス様は、今、姦淫の現場で捕らえられた女に対して、言われました。「わたしもあなたにさばきを下さない。行きなさい。これからは、決して罪を犯してはなりません。」御子は、世を裁くためではなく、世を救うために来たとヨハネ 3 章にあります。

その後、こう続けてヨハネは話しています。「3:19-21 そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。しかし、真理を行う者は、その行いが神にあってなされたことが明らかになるように、光の方に来る。」女は、光であられるイエス様のところに連れてこられました。そして、「主よ」と彼女がイエス様を呼んだように、心もイエス様

のところに来たのです。そこ行いが明るみに出されたのですが、しかし、それゆえにイエス様の深い憐れみによって、後にご自身が血を流されるのですが、その血潮のゆえに清められました。それで、主は、「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」と言われていました。人生の道筋において、つまづくことがないということです。

もう一つ、これが仮庵の祭りが終わった直後のことであることを思い出してください。前回、仮庵の祭りでは、水をシロアムの池から汲んで祭壇のところで注ぐ儀式があることを紹介しましたが、もう一つの儀式は、燭台に火を灯すというものです。大きな燭台が神殿に 2 台置かれていました。夕暮れになると、祭司たちがそこに火を灯していました。それが大きな光だったので、エルサレムに周囲の路地まで照らしていたとのことです。ですから、主が、「わたしは世の光です。」と宣言された時、「わたしこそが、その光なのです。」ということを連想できたでしょう。そして、イスラエルの歴史において、神が光として現れていたのは、あの荒野の旅で、火の柱となってご臨在しておられたのですから、この方が生ける水を持っているだけでなく、光であられると宣言されるのは、その時にふさわしいことでした。

主は、6 章において、「わたしは、いのちのパン」と言われましたが、ここでは「いのちの光」と宣言されています。この方にいのちがあります。なので、いのちのパン、いのちの光と言われていきます。そして 6 章以降で注目していただきたいのは、イエス様は、「わたしは、ある」そのものであられるということを明かしていかれることです。英語ですと、I AM、ギリシア語ですと「エゴ・エイミ」です。かつてモーセに対して、主はこういわれました。「出エ 3:14 わたしは、『わたしはある』という者である。」主が、「わたしは、いのちのパン」という時も、「わたしは、いのちの光」という時も、ご自身がモーセに現れた「わたしは、ある」という者なのだということを証言しておられるのです。

## 2B 父を知らないパリサイ人 13-20

13 すると、パリサイ人はイエスに言った。「あなたは自分で自分のことを証しています。だから、あなたの証しは真実ではありません。」14 イエスは彼らに答えられた。「たとえ、わたしが自分自身について証しをしても、わたしの証しは真実です。わたしは自分がどこから来たのか、また、どこへ行くのかを知っているのですから。しかしあなたがたは、わたしがどこから来て、どこへ行くのかを知りません。15 あなたがたは肉によってさばきますが、わたしはだれもさばきません。

パリサイ人たちが言及しているのは、申命記にある、二人また三人の証人のことです。自分で証言しているのであれば、自分で言っているだけで有効ではない、ということです。しかしイエス様は既に 5 章にて、ご自身以外で証言するものがあるとされました。バプテスマのヨハネ、そして主ご自身の行われるわざがあります。また父ご自身が天からの声もありましたし、そして聖書そのものが、自分を証言していると言われていました。それにも関わらず、彼らは受け入れていないのです。しかし、イエス様ご自身は、神から来た方であり、神の独り子である方であり、ご自身が自分を

証言してもよいのです。神ご自身が、ご自身を証言する時に、他に証人を立てることは本質的にできません。ご自身についてすべてを知る被造物は存在しないからです。だから、「わたしは、ある」と言われて、ご自身を現わす、啓示することしかできないのです。

そして、どこから来て、どこへ行くのか？ということについては、父なる神から来て、父なる神のみもとに行くということです。けれども、あなたがたは知らないと言われています。まだ、神によって生まれておらず、神のものとされていないからです。どんなに聖書知識を持っているとされていても、その霊的な真理については知る由もないのです。

そして 15 節でイエス様は、ご自身と彼らの姿勢を比べておられます。肉によって裁くとは、上辺で裁くこととあり、目で見えること、人間的な基準で裁くということです。しかし、そういったことについては、イエス様は判断を下しません。例えば、教育がどうであったか？とか、関係のないことです。私たちも、イエス様に倣いたいですね。

16 たとえ、わたしがさばくとしても、わたしのさばきは真実です。わたしは一人ではなく、わたしとわたしを遣わした父がさばくからです。17 あなたがたの律法にも、二人の人による証しは真実であると書かれています。18 わたしは自分について証しする者です。またわたしを遣わした父が、わたしについて証しておられます。」

イエス様は、裁かれる時は必ず、父なる神が裁かれるように裁かれます。私たちが何かを判断する時も、神がそう言われたからという理由で判断します。そして、イエス様ご自身が申命記にある、二人、三人の証言を取り上げて、父と子という二者が証言しているのだと言われています。

19 すると、彼らはイエスに言った。「あなたの父はどこにいるのですか。」イエスは答えられた。「あなたがたは、わたしも、わたしの父も知りません。もし、わたしを知っていたら、わたしの父をも知っていたでしょう。」

今、ユダヤ人たちはあざけて、「お前の父というものは、どこにいるのだ？」と言っています。マリアが処女降誕の宣言を受けて、ヨセフはマリアが妊娠したことを知った時に、内密に離縁しようとしたほどでした。イエス様が婚外子なのだという噂が流れていたのです、それを彼らに取り上げました。けれどもイエス様は、「あなたがたは、父を知らないのだ」と言われています。これは致命的ですね、彼らこそが神を知っているはずの人たちですが、ところが知らないのだ、と言われるのです。牧師や神学校の教授が神を知らない、と言われているのと同じです。そして、イエス様を知っていたら、父を知っていたはずだと言われているのは、イエス様が神と同一で、引き離すことのできない存在だということです。

20 イエスは、宮で教えていたとき、献金箱の近くでこのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。

神殿で献金箱があるのは、婦人の庭というところですよ。何も女性だけの庭ではなく、女性も入れるところ、という意味で、男女がどちらもいます。ルカの福音書で、やもめが献金をし、またパリサイ派も献金していましたね、その場所です。そこに献金箱が 13 もの箱が置かれていました。いわば公のところで主は語っておられたのですが、逃げ隠れしていないのですから、そのまま捕えようと思えば容易にできました。けれども、神の守りがあります。神が、イエス様が捕らえられる時を定められているのであり、それまでは守られているということです。

## 2A 父のところに行く方 21-30

### 1B 罪の中で死ぬ者たち 21-24

21 イエスは再び彼らに言われた。「わたしは去って行きます。あなたがたはわたしを捜しますが、自分の罪の中で死にます。わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません。」22 そこで、ユダヤ人たちは言った。「『わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません』と言うが、まさか自殺するつもりではないだろう。」23 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは下から来た者ですが、わたしは上から来た者です。あなたがたはこの世の者ですが、わたしはこの世の者ではありません。24 それで、あなたがたは自分の罪の中で死ぬと、あなたがたに言ったのです。わたしが『わたしはある』であることを信じなければ、あなたがたは、自分の罪の中で死ぬことになるからです。」

イエス様は、ますますはっきりと、彼らに霊的真理を伝えられます。主は、十字架で死なれ、三日目によみがえられ、それから天に昇られます。しかし、彼らは罪の中で死ぬので、天の中に入ることはできないということです。けれども、彼らは肉で裁いているので、イエスが自殺するのか？と呟いています。ユダヤ教において自殺は、厳しく禁じられていたので、ここでもあざけているのです。けれどもイエス様ははっきりと、ご自身は天から来た者、上から来た者で、彼らはこの世に属する者なのだとされています。上から生まれる、新しく生まれることと、罪の中に行き、この地上に属しているのとでは、水と油のような関係、混じることのない関係であることがよくわかります。

そして、「わたしはある」ということを主は言及し始めておられます。この方が、モーセに現れた主ご自身だということです。それを信じなければ、罪の中で死にます。

### 2B 「わたしはある」という方 25-30

25 そこで、彼らはイエスに言った。「あなたはだれなのですか。」イエスは言われた。「それこそ、初めからあなたがたに話していることではありませんか。26 わたしには、あなたがたについて言うべきこと、さばくべきことがたくさんあります。しかし、わたしを遣わされた方は真実であって、わ

たしはその方から聞いたことを、そのまま世に対して語っているのです。」

イエス様が、ご自身のことを「わたしは、ある」と言われて、かつ、あなたがたは罪の中で死ぬと言われたので、彼らは怒っています、「そんなことを言うからには、お前は誰だというのか？」ということです。けれども、イエス様は、政治的意味合いを含むメシアという言葉を使わずに、他の言葉によって、数多く、ご自身の本性を明かされています。ですから、彼らが裁かれなければいけない理由というものをたくさん持っておられるのですが、父なる神ご自身から聞いたことだけを語っている、と言われます。ここは私たちも大事ですね、拒んでいる人たちがいかに神の裁きに値するか、いくらでも欠点をあげつらうことはできますが、それは神が命じておられるのではないでしょう。主が命じられていることに集中することが、御心です。

27 彼らは、イエスが父について語っておられることを理解していなかった。28 そこで、イエスは言われた。「あなたがたが人の子を上げたとき、そのとき、わたしが『わたしはある』であること、また、わたしが自分からは何もせず、父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していたことを、あなたがたは知るようになります。29 わたしを遣わした方は、わたしとともにおられます。わたしを一人残されることはありません。わたしは、その方が喜ばれることをいつも行うからです。」30 イエスがこれらのことを話されると、多くの者がイエスを信じた。

「あなたがたが人の子を上げた」というのは、主が十字架に付けられる時です。それこそが、イエスが主なる神ご自身であることが分かるということです。ゼカリヤ書 12 章に、この預言があります。「わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を持って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。」ここでの「わたし」は主なる神、ご自身です。この方を突き刺した、ということです。しかし、このような苦しみを通っても、父なる神はずっとご自身と共におられる、一人で残されることはないと言われ、ご自身が甦り、天に昇られることまでも示唆しておられます。

そこで、「多くの者がイエスを信じた」とあります。これは、すばらしいことです。けれども、エルサレムにおいて、2 章 23-24 節ですが、多くがイエスの名を信じたけれども、イエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった、とあります。ここは大事ですね、聖書の中に、福音書の中に、単に「信じた」とする人々が、真実に信じたのかどうかを吟味している姿が出ているのです。私たちはとにかく、口で、信じますと告白した人は必ず救われていると自動的に思ってしまいがちですが、本当に救われているかどうかは、その人が真理の中にその後、留まっていることによって明らかにされます。

### **3A 真理のことは 31-47**

そこでイエス様は、すかさずフォローアップをされます。以前、ベテスダの池で癒された男にも、

後で、「これから罪を犯してはいけない」と告げるためにやってこられた場面がありましたね。後で、信仰に留まるように励ましているのです。そのことを行われます。

### 1B 罪からの自由 31-36

31 イエスは、ご自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「あなたがたは、わたしのことばにとどまるなら、本当にわたしの弟子です。32 あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」

イエスはまず「わたしのことばにとどまるなら」と条件を付けておられます。ユダヤ人たちが自分たちの思考で、この人はメシア、キリストかもしれないと思って受け入れたのですが、イエスが語られたことをそのまま心から受け入れたわけではありませんでした。留まるというのは、他の箇所では「宿泊する」とも訳されています。いっしょに時間を過ごすことです。つまり、イエスのことばを自分の内に、まるで宿泊するかのように留めておくということです。これは、良い土地に種を蒔くたとえにもつながります。イエスを信じたといっても、岩地のような心であっても、茨が生えている心であっても、実を結びません。良い心を受け入れてみことばを守るなら、何十倍もの実を結びます。

それによって、弟子と言えるのですね。「本当にわたしの弟子」と言われます。先に、カペナウムの会堂で、主が、ご自身の肉を食べ、血を飲まなければ、永遠のいのちを得ることはできないと話された時、そんな言葉は聞いてられないとして、離れて行った弟子たちが多くいました。けれども、ペテロは、「他にどこに行けというのですか。あなたのことばに、永遠のいのちがあります。」ということを行いました。本当の弟子は、イエス様のことばに留まります。

そして、「真理を知り、真理はあなたがたを自由にします」と言われます。偽りというのは、私たちが奴隷状態にします。「偽りの広告」など、その言葉に踊らされているいろいろなものを買った挙句に、実はだまされていたことが分かり、大きな損失を被ります。「偽り」というのは、自分が欺かれている間は、それが偽りだと分かりません。だから奴隷状態になるのです。アダムが罪を犯し、罪の奴隷とさせたのは、蛇による欺きでありました。それで罪の奴隷状態になりました。しかし、真理がこの世に入って来て、真理によって人は自由にされるのです。異邦人が、道徳的に無感覚となって、不潔な行いを貪っている中で、パウロはエペソの人たちに言いました。「4:20-21しかしあなたがたは、キリストをそのように学んだのではありません。ただし、本当にあなたがたがキリストについて聞き、キリストにあって教えられているとすれば、です。真理はイエスにあるのですから。」

ここで、真理というのが、イエスご自身にあるということに注目してください。真理というと、何か数学で説くような絶対解。事実、現実のような意味合いですがけれども、聖書は、もっともっと、人格的なものです。つまり、真実とか、誠実に近いものです。神が語られた言葉がその通りだ、約束もその通りで、神は信頼に値する方だという意味合いのことです。「頼りになる、この人は本物だ」み

たいな意味合いです。なので、イエス様の言葉を留まらせているならば、真理を知って、そしてその真理が自分を自由にします。この自由については、次にイエス様がもっと詳しく話されます。

33 彼らはイエスに答えた。「私たちはアブラハムの子孫であって、今までだれの奴隷になったこともありません。どうして、『あなたがたは自由になる』と言われるのですか。」

聞いていたユダヤ人が、いかに盲目になっていたかが分かります。彼らがアブラハムの子孫であるという自負から、だれの奴隷にもなったことがないと言っています。アブラハムの子孫は祝福される民で、奴隷などと言われる筋合いはないということです。イエス様が語られている自由は、そうした人間的なことではありません。

しかし、事実に照らし合わせても、彼らが奴隷になったのは、これまでに何度となくありました。エジプトにおける奴隷状態、士師の時代における虐げ、またアッシリア捕囚とバビロン捕囚がありました。そしてたった今、ローマの支配を受けています。ローマ兵はいつでも、人々の肩に剣を置いて、「俺の荷物を運べ」と命令することができました。これが自由な状態なのでしょうか？それでも彼らは、プライドから「今までだれの奴隷になったこともありません。」と言ったのです。このように私たちは、自分が奴隷状態にいるのだということを認めないと、自分の本当の姿、真実の姿に対して盲目になります。

34 イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。罪を行っている者はみな、罪の奴隷です。35 奴隷はいつまでも家にいるわけではありませんが、息子はいつまでもいます。36 ですから、子があなたがたを自由にするなら、あなたがたは本当に自由になるのです。」

イエス様の語られている自由というのは、飽くまでも「罪からの自由」です。それは、ローマの十字架を背負わされていたイエスご自身が、父の御心を行うにあたって全く自由であられて、罪からも自由であられたことから分かります。

ところで、私たちは自分が主体性のある存在だと思っています。実は、善と悪を区別して、そして選択して生きている自由な存在なのだと思っています。そして罪だと言われていることに対して、自分がそれを行なっても、いつでもそれを止めることができる、自分がそれを支配しているのだ、制御しているのだと思っています。けれども真実は逆です。一度罪を行なえば、私たちはもはやその罪を支配しているのではなく、罪が自分を支配しているのです。麻薬中毒になっている人に聞いてみてください。彼らがなぜ、それを止めることができないのでしょうか？「あと一回で、最後だ。それでもうやめるから。」と言います。そのあと一回が、またもっとやりたいと思わせるようになり、いつまでも止められないのです。でも自分は麻薬に対して自由なのだ、と思っているのです。

ローマ人への手紙6章 16 節を読んでみたいと思います。「あなたがたは知らないのですか。あなたがたが自分自身を奴隷として献げて服従すれば、その服従する相手の奴隷となるのです。つまり、罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至ります。」自分はどちらかに従属することによって、初めて他のものから自由になります。神を信じる、宗教を信じるのは窮屈だ、自由がなくなると言います。けれども、実は自分はどちらかに従うかしかないので、どちらにも属せず、自由になっているわけではありません。神に自分のすべてをささげて生きることを選べば、罪から自由になります。反対に、神から自由にされたいと願えば、罪の奴隷になります。

そして 35 節ですが、この「子」とは、イエスご自身のことです。天と地をお造りになられた創造主の子のことです。ここで言っている「家」とは、天のことです。神がおられる家、つまり天にイエスは神の子としてずっとおられます。奴隷には、七年後に解放されるという律法がありますから、奴隷はいつまでも家にいません。けれども、息子はずっといます。アブラハムやモーセなど、みなが主のしもべでした。しかし、イエスは神の子です。だから、その自由というのは永遠性があります。完全性があります。本当の自由があるのです。そして、私たちイエスを信じる者は、天におられる父の子どもとされました。ですから、神の子どもになったということでのキリストにある自由を得ています。天に家が備えられています。私たちも、真の自由を得ています。

## 2B イエスのことばを聞き入れない者 37-47

### 1C イエスへの殺意 37-41

37 わたしは、あなたがたがアブラハムの子孫であることを知っています。しかし、あなたがたはわたしを殺そうとしています。わたしのことばが、あなたがたのうちに入っていないからです。38 わたしは父のもとで見たことを話しています。あなたがたは、あなたがたの父から聞いたことを行っています。」39 彼らはイエスに答えて言った。「私たちの父はアブラハムです。」イエスは彼らに言われた。「あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行うはずです。40 ところが今あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに語った者であるわたしを、殺そうとしています。アブラハムはそのようなことをしませんでした。

イエス様は、もちろん彼らがアブラハムの血縁の子孫であることを知っておられます。イエスご自身、人としては、アブラハムの子孫であり、ユダヤ人です。けれども、ここでイエス様が言われている「子」というのは、霊的にどこから生まれているのか？ということ、そして、誰に従っているのか？ということです。アブラハムを自分の父としているのであれば、アブラハムの行いに倣うはずです。子が父に従い、父に倣うように、アブラハムの足跡に倣うはずです。ところが、イエス様を殺そうとしています。

ここで二度、イエス様は、ご自分のことばが彼らのうちに入っていないこと、またご自身が真理の言葉を神から聞いて語ったことを話しておられます。イエス様の言葉が自分のうちに入っているか



らこそ、神に従えるはずで、真理のことばが入っていないので、その思いは違うところから来ます。それを、「あなたがたの父から聞いたこと」と言われています。

41 あなたがたは、あなたがたの父がすることを行っているのです。」すると、彼らは言った。「私たちは淫らな行いによって生まれた者ではありません。私たちにはひとりの父、神がいます。」

彼らの言葉が、酷くなっていきます。ついに、母マリアの淫らな行いによって生まれてきた者だと、はっきりと言ってしまいました。そして、さらに彼らは、アブラハムの子ではなく、大胆にも、神ご自身が父であると言います。そこでイエス様も、彼らの父とは誰なのか、はっきりと語られます。

#### 2C 悪魔から生まれた者 42-47

42 イエスは言われた。「神があなたがたの父であるなら、あなたがたはわたしを愛するはずで、わたしは神のもとから来てここにいるからです。わたしは自分で来たのではなく、神がわたしを遣わされたのです。43 あなたがたは、なぜわたしの話が分からないのですか。それは、わたしのことばに聞き従うことができないからです。」

核心に近づいてきました。神が父であるなら、神の独り子はもちろん愛するはずで、イエス様は何度となく、自分勝手に来たのではなく、父に命じられて、遣わされて来たのです。

44 あなたがたは、悪魔である父から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと思っています。悪魔は初めから人殺しで、真理に立っていません。彼のうちには真理がないからです。悪魔は、偽りを言うとき、自分の本性から話します。なぜなら彼は偽り者、また偽りの父だからです。

イエスが話されていた、「あなたがたの父」とは悪魔のことでした。彼らは悪魔の子なので、悪魔がやりたいことをやろうとしておしゃっています。悪魔について二つのことが書かれています。一つは人殺しです。悪魔は神を憎み、神のかたちに造られた人間を殺すことだけを考えています。悪魔は、アダムとエバを殺しました。彼らは霊的に死にました。そして、悪魔はカインの憎しみによって、アベルを殺しました。そして今、人となって来られた神を殺そうとしています。もう一つは、「偽りの父」だということです。悪魔は初めからうそつきであり、嘘をつかないことはありません。エバに対して、「決して死なない」と嘘をつきました。面白いですね、神は真理を言うことしかできないのに、悪魔は嘘をつくことしかできません。

ここで、はっきり分かることは、真理の言葉を受け入れていなければ、その人は悪魔の支配下にあり、その中で従わなければいけない者であるということです。「エペ 2:1-3 さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従

い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。私たちもみな、不従順の子らの中であって、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」

45 しかし、このわたしは真理を話しているので、あなたがたはわたしを信じません。46 あなたがたのうちのだれが、わたしに罪があると責めることができますか。わたしが真理を話しているなら、なぜわたしを信じないのですか。47 神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。」

真理を語られているのに、信じない。それが神から出た者ではないからだ、ということです。ここに、真理の言葉と、神によって新たに生まれること、そして新たに生まれることによって、初めて真理の言葉に対して、アーメンといえることが分かります。「Ⅱコリ 1:20 神の約束はことごとく、この方において「はい」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです。」

#### **4A 御父の独り子 48-59**

##### **1B いのちのことば 48-51**

48 ユダヤ人たちはイエスに答えて言った。「あなたはサマリア人で悪霊につかれている、と私たちが言うのも当然ではないか。」

これは、ものすごい罵り言葉です。彼らは悪霊の長を、「シヨムロニ」と呼んでいました。サマリア人は、今でもヘブル語で「シヨムロン」と呼びます。ですから、サマリア人を指す言葉を使っています。これをもって、これを聞いていたユダヤ人は、「悪霊につかれている」としたのです。ユダヤ人指導者たちが、悪霊のかしらによって悪霊を追い出しているとしていましたが、彼らもそのようにみなしたのです。

それにしても、イエスを信じたとされた人々が、ついにイエス様に悪態をつくところまでになっています。ここから、主が言われていることがよくわかります、真理のことばを受け入れ、心に留めていないということは、つまりは本当の意味で神のよって生まれておらず、神によって生まれていないのであれば、悪魔の支配のままにされているということです。

49 イエスは答えられた。「わたしは悪霊につかれてはいません。むしろ、わたしの父を敬っているのに、あなたがたはわたしを卑しめています。50 わたしは自分の栄光を求めません。それを求め、さばきをなさる方がおられます。51 まことに、まことに、あなたがたに言います。だれでもわたしのことばを守るなら、その人はいつまでも決して死を見ることはありません。」

イエス様は卑しめられています、それでも父なる神に裁きをゆだねておられます。そして、本当に伝えなければいけないこと、それは、「ご自分の言葉には命がある」ということです。主のみことばを守るなら、永遠の命を得ることができます。いつまでも永らえ、死を見ることはありません。

## 2B 初めからおられる方 52-59

52 ユダヤ人たちはイエスに言った。「あなたが悪霊につかれていることが、今分かった。アブラハムは死に、預言者たちも死んだ。それなのにあなたは、『だれでもわたしのことばを守るなら、その人はいつまでも決して死を味わうことがない』と言う。53 あなたは、私たちの父アブラハムよりも偉大なのか。アブラハムは死んだ。預言者たちも死んだ。あなたは、自分を何者だと言うのか。」

彼らは肉でずっと判断し続けています。アブラハム、預言者は、すべて墓があります。なのに死を見ることがないなどは、あなたは、それ以上の何者だと言うのか？ということですよ。

54 イエスは答えられた。「わたしがもし自分自身に栄光を帰するなら、わたしの栄光は空しい。わたしに栄光を与える方は、わたしの父です。この方を、あなたがたは『私たちの神である』と言っています。55 あなたがたはこの方を知らないが、わたしは知っています。もしわたしがこの方を知らないと言うなら、わたしもあなたがたと同様に偽り者となるでしょう。しかし、わたしはこの方を知っていて、そのみことばを守っています。

彼らが、「お前は、父祖アブラハムを出し抜いてまで、自分を売りたいのだろうか？」と言っているの、イエス様は反論しておられます。自分の栄光を求めたら、それは虚しい。父が栄光を与えられる方だと。これは、私たちも同じです、自分の栄光を求めたら虚しいです、栄光を与えられるのは主です。それから、ご自身と父との関係を話しておられます。もう、これは変えることのできない真実であり、もしそうではないとしたら嘘をつくことになります。

56 あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見るようになることを、大いに喜んでいました。そして、それを見て、喜んだのです。」

イエス様が、はっきりと伝えられ始めます。創世記 12 章の初めに、アブラハムが神に召されて、神の示す地に出ていくように命じられました。そして、「あなたによって、すべての国民が祝福を受ける。」と言われ、その後、「あなたの子孫によって、祝福される」と言われました。そこに、自分の子孫にキリストが来られることを彼は知りました。神を信じて、その信仰が義と認められました。

そして、アブラハムが「それを見て、喜んだ」と言われています。これは、はるか将来の日を見たということだけでなく、事実、ご自身をアブラハムが見て、喜んだということです。それはいつなのか？考えられるのが、メルキゼデクです。(創世 14:17 以降)エルサレムから神の祭司であり、平

和の王であるメルキゼデクが来ました。メルキゼデクは、父母が存在せず、系図もなく、その生涯の初めもなく終わりもありません。神の子のようであり、とこしえに祭司としてとどまっています(ヘブル 7:3)。アブラハムは、この方から祝福を受け、この方に十分の一のささげものをしました。つまり、アブラハムはキリストご自身、あるいはキリストを示す存在に会ったということです。

57 そこで、ユダヤ人たちはイエスに向かって言った。「あなたはまだ五十歳になっていないのに、アブラハムを見たのか。」58 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』なのです。」59 すると彼らは、イエスに投げつけようと石を取った。しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた。

ここのユダヤ人たちは、イエスが三十歳以上であることを知っています。そして五十歳という年ですが、レビ人が会見の天幕で奉仕できるのは、三十歳から五十歳までと民数記に書かれています。主に仕える年齢制限です。つまり現役の奉仕者なのに、何をもってアブラハムを見たのか？ということです。

そこで、イエス様が大胆に語られます。「アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』なのです。」であります。これは二つの意味があります。アブラハムが生まれる前から、わたしは存在していたということ。これは永遠の昔から存在していたことを示します。そして、モーセに現れた主が、「わたしは、ある」という名で現れました。イエス様は、まさにその主ご自身であるということです。だから、怒りました。神であるということを、今、ここで宣言したのですから。石を投げて、その場で死刑にしようとした。けれども、主は身を隠され、宮から出て行かれます。主は、ご自分の時が来るまで、守られていますね。

このようにして、イエス様ははっきりと、神から生まれた者と悪魔の子を区別されました。イエスを信じたとしても、この方の真理の言葉を受け入れていなければ、石打にしようとするほどの憎しみを抱くことになるということです。つまり、フェイクはできないということです。偽りはすぐに、メッキが剥がれます。「Iヨハ 3:8-10 罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。その悪魔のわざを打ち破るために、神の御子が現れました。神から生まれた者はだれも、罪を犯しません。神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです。このことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行わない者はだれであれ、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。」